

# 野外教育の教育的価値に関する研究 ―子どもの自然体験活動を中心に―

## A study on the educational value of outdoor education -Focus on the students' camp activities in natural settings-

1K04B033-7

榎本 一也

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 杉山千鶴先生

### 目的

現在、教育に関してさまざまな議論がなされているが、その中で野外教育が注目されている。そこで、野外教育の実態を明らかにし、それが必要とされるようになった背景、実際に行われている取り組みなどから野外教育の必要性を検討する。また、野外教育の現状や課題を明らかにし、野外教育に期待される効果から子どもに与える影響、今後の教育に与える影響を検討し、これからの野外教育の在り方を提示する。

### 方法

野外教育や自然体験活動の歴史・実例などを踏まえ、文献や文部科学省をはじめとする公的機関の取り組みなどから、野外教育の現状を明らかにする。またその現状から考えられる課題に対する改善点を見出し、これからの野外教育がどうあるべきかを文献を用い検討する。また同時に、過去の実例などから自然体験活動や組織キャンプが青少年に与える効果などについても考える。

### 各章の概要

#### 【第1章】 野外教育

日本ではじめて野外教育という言葉が公的に使われたのは、1996年に文部科学省生涯学習局青少年教育課から出された「青少年の野外教育の充実について」（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議・報告）においてである。野外教育はこれまで、LB・Sharp や J. Smith、Donaldsonらがそれについて研究し、提言してきた。自然体験活動・野外活動を手段として行われる野外教育には、参加した仲間とふれあいを深めたり、自然から多くの刺激を受けるなどさまざまな特性がある。野外教育では、野外活動の持つこれらの潜在的教育効果を最大限に活用することを目的としている。

野外教育の実体においては、戦前から YMCA をはじめとする民間団体の手によって、青少年の健全育成を目的とした組織キャンプ活動が活発に行われていた。そして、「スポーツ振興法」において野外活動の奨励が謳われたことにより、民間団体はもちろんのこと、公的機関の野外教育に関する活動も盛んに展開されるようになった。

近年では、野外教育を環境教育と冒険教育の関

連からとらえる理論が注目されているなど、野外教育という言葉は次第に成熟しつつある。

#### 【第2章】 野外教育の必要性

経済の成長、交通・情報システムの整備などのおかげで、私たちの生活水準は向上し、便利な生活を送ることができるようになった。その一方で人々はゆとりのない慌ただしい生活をし、過度の学歴偏重が生じ、地縁的な結びつきや連帯意識の薄れた地域社会が生まれるなど多くの弊害も出てきた。子どもたちを取り巻く環境もまた、少子化、核家族化、都市化、情報化、過度の学歴偏重主義など社会全体の急変に伴い、大きく変化してきている。子どもの外遊びの場や機会なくなり、テレビやゲームにかなりの時間を費やし、疑似体験や間接体験が多くなった。このような社会や子どもの在り方の変化によって野外教育の必要性は次第に増していった。

それは現行の学習指導要領からもわかるように、学習指導要領のいたるところに「体験の重視」や「自然体験活動の充実」などと明記されている。野外教育は子どもたちに全人的成長をさせるものとして大きく期待されている。

#### 【第3章】 これからの野外教育

野外教育をより向上させるためには、プログラム開発や指導者の育成などの改善が必要とされる。また、野外教育の場の課題や野外教育における安全対策の課題など、野外教育の質の向上のために多くの課題が存在する。

学習指導要領に明記されている「生きる力」は、変化の激しい社会にあって、他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる人間としての実践的な力であり、実際の社会生活において生かされるものでなければならない。このような「生きる力」は、青少年期において、学校で組織的、計画的に学習する一方、家庭における親子など家族の触れ合い、地域社会における友達との遊びや人々との交流などの様々な体験や活動を通じて、はじめて身に付くものである。自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる野外教育が、このような青少年の体験不足を補う活動として、高い教育的価値を有するであろう。今後、野外教育はより大きく教育に貢献してくであろう。